

教務だより

2010年11月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

就職難時代を生き抜く力

茗溪塾塾長 宇野 雅春

就職難が囁かれる今日この頃です。時代の大きな変化が感じられます。大学受験説明会でもテーマは『40人中30人が「負け組」？』で、2010年の文部科学省学校基本調査（速報値）を基（もと）にしての大学新卒者54万人の分析をシミュレーションしました。

それによると、この54万人は①ニート・家事手伝い9万人 ②アルバイト2万人 ③大学院・専門学校等進学者9万人 ④派遣・契約社員11万人（推測）⑤正社員23万人（ただし、3年以内離職率37%）に分類されます。文部科学省の数値も勿論抽出調査なので、現実そのものとはいえなくても、周りから聞くいろいろな情報や出来事はそれを裏付けているようにも思います。親戚からも、大卒の娘に12月にやっと本意ではないところから内定がもらえたけれど、とにかくそこに就職してみるという話もあったし、文系の大学院に進学した嘗（かつ）ての卒業生が、全く就職の展望がみえないという話は、すでにかなり前から現実のこととして見聞きしています。

これによると40人クラスをひとまとまりとすれば、20代の最も輝ける時期を、思い切り仕事や生活をエンジョイできるいわゆる「勝ち組」は10人しかいないことになります。失業率5パーセントは、世界の中で比較してもまだまだいい方ですが、あくまで求職者を対象とした数値ですので、潜在的な失業者はまだ多いという事だと思います。特に30歳前の若年者失業率の35%という数字は最早「世界レベル」です。

身の回りに目をやってみると、確かに新卒者を雇うという事に企業側の不安は多くあります。何しろ、企業が、その新卒者を社会に通用する人材として、育て上げるのものすごいエネルギーと費用を要するという事です。茗溪塾でも、新卒で入社試験を受験した新卒者は460人もいました。選考して採用してもいいかなと思った人は、ほんの10人位です。テストがまず通過できない人が多いのですが、テストを通過しても、「選ばれる」という事の意識が薄く、「条件」や「勤務地」などへのこだわりが先行するケースが多くありました。受験も同じですが「選ばれる」というより、「選ぶ」と勘違いしているのです。結局、採用に至った人は、ほとんどが学生時代に講師を経験し、その厳しさや、仕事としての充実感を実感している人なのです。

かつてはあまり意識しなかったことがなぜここで浮上してきたかという、塾でさえ嘗ての「塾」とは成り立ちが違ってきていることがあります。社会的にも認められてきている分、要求される社員のレベルも高くなってきています。ましてや、自分の子供を預ける親にしてみれば、講師の人格や技量への期待は大きなものです。「教える技量」以上に「社会人」、しいて言えば「教育者」としての資質が大きく問われるようになってきています。クレームなどは楽しいことではありませんが、決して悪い面ばかりではないと思っています。「期待」のレベルが高いという事なのでからむしろ受け止めて自ら改善努力するべきことと考えています。つまり、この就職難が「教育」につきつけてくるものは決して今後の社会を悪くするばかりのものではないということです。日本だけがいい思いをしていたといわれる時代も失っていたものは多くあった気がするし、低成長の中でつきつけられてくる課題も、むしろいい意味でのスリム化であったり、合理化であったり、本当に必要なものや、意義のあることへの捉え返しだったりします。

「時代がつきつけてくるもの」それを生かすのか？それとも時代のせいにして不本意なまま進むのか？生徒たちがこれからその「時代」を担っていくこととなります。「教育」は大きな転換点を迎えています。「受験に勝つ」ということは、他人を蹴落として、自分の幸福を得るという事ではありません。むしろ自分を高めることで他の人の合格も喜べるし、不合格の痛みも共有できるという事です。つまり、コミュニケーションの高いレベルを作るという事です。（WIN・WIN）

そのレベルが、受験のみならず、時代を生き抜く力になると思っています。